

解放の女神……女流詩人カマラーの告白……【目次】

【第一章】……ヨーロッパ人の学校を受けた褐色の肌の子供の屈辱……	10
【第二章】……子供のころの悪夢とたった一人の「よき友」……	13
【第三章】……作った詩がまた私を泣かせた……	18
【第四章】……色好みの領主から贈られたナラバット館……	21
【第五章】……秘密の引き出しには龍涎香の香る茶色の小びんがあった……	29
【第六章】……私は彼の魅力に夢中になつた……	33
【第七章】……良家のナイルの女性は、決して性を口にするとはなかつた……	40
【第八章】……淋しい女神……	45
【第九章】……読者は彼に死者と每晚床に入つてもらひたかつた……	50
【第十章】……彼女は半ばは恋に狂い、私にはほとんど目もくれなかつた……	54
【第十一章】……寄宿学校にまこてゐるのは、私とはまるでかけ離れた家庭環境の少女たちだつた……	60
【第十二章】……とてないアニー・バンサムを若い恋人がでまこる……	65
【第十三章】……修道女たちとは私たちの書く手紙をいつも検閲した……	71
【第十四章】……お金持ちと結婚して俗物になりたかつた私……	76
【第十五章】……私たちはあの手この手の巧妙なサブライムの対象となつた……	80
【第十六章】……私は太陽神に息子を授けてと祈つた……	85
【第十七章】……ある朝、サニヤーシンは阿片の香りを残して去つていった……	89
【第十八章】……結婚した大人は皆、ベッドでは道化なの？	
サーカスの軽業師なの？……	96
【第十九章】……その女の声は変わつて、……私は直ぐに彼女と恋におちた……	101
【第二〇章】……彼女は私の体を自分の体にぴったり抱き寄せて横たわつた……	107
【第二一章】……彼の手は私を傷つけ、肌を青や赤のあざを残した……	113
【第二二章】……結婚初夜……何度も何度も彼は私を傷つけ、その間中、カタカリのドラムが物憂く鳴つていた……	120
【第二三章】……愛の金貨……	128
【第二四章】……私はコックに、バルビトール塩酸を買に行かせた……	133
【第二五章】……血まみれの月……	138
【第二六章】……暗闇の第一章……	143